




さぎし
詐騎士 8

かいとーこ
Kaitoko



RB

レジーナ文庫



登場人物
紹介

▼ 国王

ギルネストの父親。
面食いで女好き。

▲ エーメルアデア

ギルネストの母で、
国王の第二夫人。
嫌いな者はいびるのが常。

セルマ▲

国王の正妃。
病で臥せているが
その原因は……？

ギルネスト▲

ランネル王国の第四王子で
軍の幹部。別名「サディスト」。
実は花嫁以上に結婚を
楽しみにしている。

グランディナ▲

ギルネストの双子の妹。
婚約者のニースを嫌っている。

▲ ニース

国一番の騎士だが、婚約者に
想いを伝えられないヘタレ。

ウイシュニア▶

聖女付きの侍女。
大貴族の娘で、
ティタンに恋している。

ティタン▲

ギルネストの従騎士。
同じ孤児院出の
ルゼが好きだったが……

ルゼ▲

身分、年齢を詐称し
聖騎士となった少女。
人や物を操る傀儡術かいらいじゆつが得意。
結婚を間近に控え、
マリッジブルー中？

目次

書き下ろし番外編

花嫁の主張

371

詐欺士^{さぎし}
8

7

詐^さ
騎^ぎ
士^し
8

第一話 愛とは何ぞ

愛とは何だろう。恋とは何だろう。家庭とは何だろう。

私、ルゼ・デユサ・オブゼークは、聖女を守る聖騎士という立派な職業に就く一方、今までそのどれにも恵まれなかった。だから、大抵の人が当たり前のように知っているそれがよく分からない。今でこそ色々あつて貴族の娘に仕立てられ、親兄妹も出来たが、それまでの私には親も家庭もなかった。

私は傀儡術師かいゐじゆつしだったから、親に捨てられて孤児院で育つたのだ。傀儡術師とは、物や人を操る特殊な力を持つ者達の総称だ。その上、人の心を読んだり、洗脳して意のままに操ったり、身体を乗っ取ったりすることも出来るため、とても忌み嫌われている。

私は物を操ることを得意とする傀儡術師だが、それでも我を忘れると、力を暴走させて物を壊したりする。赤ん坊の時など実の親はきつと大変だっただろう。捨てられてしまつのも仕方ないことだ。

だがそんな普通ではない私に、お貴族様の家族が出来て、おまけにこの国の第四王子、ギルネスト殿下との結婚が現実的になってきた。現実的とかプロポーズされて、指輪をもらつて、式の準備も着々と進んでいるから、よほどのことがない限りは結婚することになるだろう。

だから私は今、とても幸せだ。幸せすぎてこれが現実なのかと、少し怖くなるほどだ。いや、考えてみれば、子供の頃から人との出会いには恵まれていた。物心ついた頃には、癒しの聖女ノイリに出会い、彼女の世話をするという穏やかな暮らしが得られた。私はノイリを姉のように慕っていたし、あの頃彼女と一緒にいなければ聖騎士などにもなれなかつただろう。

彼女は程なく魔物達に誘拐されてしまったが、その後私を引き取ってくれた孤児院では、リゼンダおばあちゃんや何人もの『兄』や『姉』が心配して構ってくれ、魔術と戦闘方法を教えてくれた。以来ノイリを探すのに必死で、自分の無力さは恨んでも、実の親を恨む暇などない日々だった。まさに激動の人生である。

やがてノイリとも再会できたが、それもギル様と出会つたおかげだ。彼は美貌の王子様なのに、全てを知つて私なんかと結婚してくれると言ふし、本当に私は幸せ者である。私達の結婚式は、ギル様の腹違いの長兄、パラスト様の結婚式から半年は間を空けよ

うと最初に決めていた。その長兄の式は、この夏に終わった。だから式は、来春の早い時期から半ばくらいまでに行うことにした。ちょうど半年後に当たる冬は寒さで式どころではないし、少し遅れると春の祭りがあつて、私の主である実りの聖女エリネ様がお忙しくなるからだ。

式は二回する予定だ。一回目は都でささやかに。そして一月ぐらい間を空けて、私の故郷で大々的な本番を。ちなみに故郷での式は、妹のエフィニアと、ギル様の従騎士をしていくゼクセンの結婚式と合同で行う。

今は秋。一回目の式があと半年に迫っているため、私の周りの人達は色々忙しくしている。私はたまにドレスの試着をするぐらいだ。特にゼクセンの姉で、式を仕切っているエノーラお姉様は忙しい。

「さっきからポケットとしているけど、どうした？」

神殿の玄関前でポケットと庭を眺めていた私に、テイタンが声をかけてきた。

このテイタニスことテイタンは私と同じ孤児院で育ち、私が兄と慕っていた人だ。とても有能な増幅術師で、魔術師と組ませると大変便利なことから、凄腕の魔術師であるギル様の従騎士に抜擢された。まさしくうちの地方の出世頭である。何せギル様は、将

来軍のトップに立つのが間違いないお方だ。その側近なのだから、昔の私達からすると目の回りそうな話である。私なんか、側近どころか妻になるだけけど。

「いや、愛つて何だろうって」

「……………それは、ちょっと……………」

私の返事を聞いたテイタンは視線を逸らした。彼も親に捨てられ、彼女いない歴が年齢と同じという、私以上に愛に縁のない男だ。女性と縁がないわけではない。出世しているため人よりモテているのに、相手がどんなに美人であろうと尻込みしてお断りする奥手な男なのだ。こんな相談に乗るなど無理だろう。私だって逃げ出したい気持ちなのに。私はため息をついた。

「で、何だっけ」

そう尋ねるとテイタンは、

「だから、ホーンがこれをエリネ様の近くに置くよう言つてたつて話だよ」

と、箱を見せてきた。

そう。彼が預かったという新しい魔力測定器のことだった。大切な話なのに聞いていないのはまずい。色ボケ厳禁！ 頭の中のお花畑は撤去！ 意識ははっきりと！ 自らを心の中で叱咤していたその時、視線を感じて顔を上げた。

視線の主はすぐに分かった。テイタンの肩越しに私を見つめているのは、じょうろを手にしたうら若き赤毛の女性。エリネ様の侍女のウイシュニアだ。国内の貴族の中でも有数の名家に生まれた、生粋のご令嬢である。

彼女は現在、恋をしている。恋する相手は、私の目の前にいる孤児院出のテイタニスだ。身分違いにも程があるこの恋は、私が勤めるこりザンド神殿では一人を除いて知らない者はいない。その一人が、このテイタン本人である。

ウイシュニアはそんなニブニブな彼を、いつも陰から見つめているのだ。今のよう私のことをじっと見てくる場合もあるのだが、嫉妬心丸出しではなく、何と云うかこう、切なげな目だから、何とも言えなくなる。私に婚約者がいると分かっている、彼が異性と話をしているだけで切なくなるのだろう。普通なら諦めると言うところだが、彼女もそうすべきと分かっているから言いにくいのだ。

「じゃあ、俺はこれで」

テイタンはそれだけ言うと、振り返ってウイシュニアに笑みを向けた。

「ルゼに何か用だったのかな。邪魔してごめん」

視線には気付いていたか。さすがだ。その意味を理解できたら完璧なのに。

「そんな、わけでは……」

ウイシュニアも気付かされていたとは思っていなかったらしく、視線を揺らした。

「あ、入り口塞いでいたか。ごめん。じゃあ、俺はこれで」

玄関前にいたテイタンは、そう謝罪して色々と勘違いしたまま外に出る。恋する乙女の視線がそれを追う。テイタンは途中でバルロードに声をかけられて足を止め、談笑を始める。その様子を切なげに見つめるウイシュニア。

これが愛。これが恋。そう、これこそ私の思い描く愛で、恋！

「……………私には、出来んな」

私が必要な感じに見つめたら、たぶん何かあったとギル様に思われる。もしくは何か悪巧みしているとか疑われるのだ。

私は何か用事がなければギル様をじっと見たりしない。恥ずかしいし。つまり、私達には切ない恋心など無縁なのである。愛とは何かと問えば、何だろうかと首を傾げ合うような仲。何かあったらズバズバ言い合い、何もなくてもズバズバ言い合う仲である。なんと色気のない関係なのだろう。

まあ、ギル様が何か変なことに目覚めても嫌だから、このままでいいんだが。

やがてテイタンは今度こそ去っていき、ウイシュニアは切なげな吐息と共に神殿の中に戻った。

「なんで気付かないんだろうなあ……」

神殿の前で警備をしていた聖騎士のスルヤが、不思議そうに呟いた。

「仕方ないよ。ティタンにとってウイシユニアは住む世界が違う人だから。今でこそギル様にお任せしてるけど、都に出てこなかったらまだ狩りとか子守とかする生活してただろうし」

「ああ、そっか」

私達、孤児院の子供達は、自分がどの誰かも知らない。少なくともギル様のような高貴なお方が、あっさり信頼していいような人間ではない。だけどギル様はかつて白鎧の騎士団にいた私と知り合い、友達として、上司部下として付き合ううち、『詐騎士』などと呼ばれていた私の中に信じられる部分を見つけた。だから私と親しくしているティタンとの間にも信用が生まれた。

まあその信用は、私がオブゼーク家の次男ルーフェスであるという嘘を信じた上でのことだから、ギル様には人を見る目がなかったということでもあるんだけど。

とはいえそれがきっかけで、私はルーフェス様の双子の妹ということにされて、今や王子様の婚約者だ。しかもギル様は全部知った上で、私にプロポーズした。本当に人を見る目がおかしい人だ。

そんな私がこんなことになっているから、ウイシユニアに対し諦めるとは私もギル様も言えない。だけど相手のティタンはきつと、ウイシユニアに名前を覚えてもらっているだけでもすごいことだと考えているに違いない。

「私ですら王子様と結婚するだなんてまだ実感ないし、ティタンが彼女の気持ちに気付くなんてよっぽどのがなきや無理だよ」

「まだ実感ないのかよ。気持ちは分かんなくてもないけど……ティタンが気付くはずもないか」

スルヤは壁にもたれて頬を掻いた。

「ウイシユニアさんって、俺達を同じ人間として見てなさそうな雰囲気さえあるものなあ」

それを聞いて、近くにいた他の聖騎士達も自虐的に笑う。交替の時間が近いため、いつの間にか人が集まっていた。

「むしろティタンの方が、ウイシユニアさんを同じ人間だと思ってないんじゃないか?」

今度はシフノスが言う。確かに人間と獣族ぐらいい違う感覚だろう。ウサギ獣族のラントちゃんが人間の女にどれだけ可愛がられても、それが恋心だとは思わないのと同じだ。それぐらいいない話、と本人は思っているのだ。

「そうそう。私もギル様のごことは、王子様っていう別の生き物として見てたし」

「……………それは、ひどいな」

「いや、だって女の子にとって王子様っていうのは、男というより王子様なんだよ」

「……………その割に扱いがひどくね？」

「だってギル様、あんまり王子様らしくないんだもん」

美形だけど、私が求めている方向と違うというか。ギル様もとびっきりの美女と恋に落ちればいいのに、母親の嫁イジメの激しさと、自分の趣味の特殊さから、消去法で私なんかを選んだのだ。

「まあ、ティタンのことについては、私達じゃどうしようもないことだけは確かだし」

「身分が釣り合ってれば、協力も出来るんだけどなあ」

もしもの時は協力するが、現状では積極的に協力できない。ギル様も、いざとなったらティタンを貴族の隠し子として仕立てるつもりでうちのお父様とよく手紙のやり取りをしているようだけど、肝心の二人が進展しそうにないから、親候補になった人には打診もしていないらしい。そもそもあの気が小さいティタンじゃ、元々身分違うことを気にしすぎてそう簡単に幸せになれるとは思えないし。

「頑張れー、って心の中で応援するしかないってことか」

シフノスはここにはいないティタンを憐れむように言った。

私もそうするしかないと思う。赤の他人ならまだしも、私にとってティタンは兄のような存在なのだ。ウィシユニアの恋心より彼の幸せを優先するのは当然だろう。ウィシユニアが普通の女の子なら良かったのに。

「せめて巫女さんだったらねえ」

エリネ様付きの巫女に、ウィシユニアのように身分が高すぎる女の子はいない。ティタンと同じギル様の従騎士(じゅうきし)レイドは、巫女のモラセアが気になっているらしく、私もギル様も密かに応援している。モラセアは元気で気配り上手で可愛いし、レイドと同じ歳だし、それぞれ立派な肩書きを持ち生まれは平民と、立場的にも釣り合っている。結ばれれば皆迷わず祝福してくれるだろう。しかも二人とも素性を探られても痛くも痒くもない。身分を捏造(ねつぞう)している身としては羨ましい限りだ。

「さあて、これを設置しなきゃね。お疲れ」

私はティタンから受け取った測定器を手に、休憩に入るシフノス達に挨拶して神殿内に入った。

その日の夜。エリネ様との夕食を終えた後、時間潰し(つぶ)しに自分の婚衣装用のレースを

作ろうと、道具を取りに席を立った時だった。

ウイシュニアに袖を掴まれた。眼鏡越しにじっと見上げられ、一瞬思考が停止する。

「えっと……なに？」

思い詰めたような、真剣な表情の彼女に恐る恐る尋ねた。

昼間のことで変な勘違いしていないといいんだが。世の中には恋をすると、たとえ身内だと分かっているでも、相手の側に女がいるのが不安になる子がいるのだ。

「一つお願いがあります」

彼女が私にこんなことを言うのは初めてだ。

「私に……出来ることなら」

本当に、私に出来る範囲のお願いをしてくれることを祈って笑みを返した。

「その……ティタンさんの好きな物を教えて下さらないかしら」

出来る範囲内ではあるが、予想はしていなかった質問をぶつけられ、私は悩んだ。

「好きって言われても……」

私は目を伏せる。ティタンの好きな物……好きな物……

「基本的に好き嫌いはないと思うよ」

私はあまり人の好みとかに興味がないし、兄弟分も多いから、よっぽど好きだと表に

出していなければそういうのは分からない。だからティタンには特別好きな物はないということだ。

「強いて言うなら、でもよろしいので、教えて下さらないかしら」

「趣味もないし、強いて言うなら……肉？」

具体性のない言葉に、ウイシュニアは肩を落とす。

「に、肉とは何の肉でしょう？」

絶るすがように聞かれた。何かご馳走ちそうしたいんだろうか。

「えっと………兎肉？」

「こっち見て言うなっ！」

近くにいた私のお友達、ウサギ獣族うさぎじゆうぞくのラントちゃんが怒った。そんな姿も可愛い。

「鳥とか鹿とか？ 言い方は悪いけど貧しい食生活だったから、味ついてればいいくらいだよ。本当に何でも食べると思う」

そう言うと、彼女は唸るうな。人からももらった物なら、彼は多少不味まずくとも食べてくれるはずだ。

「あ……苦い物は苦手かも」

「それはルゼさんのお料理でしょう」

ええ、そうですよ。私は何を作っても死ぬほど苦くなる、呪われた力の持ち主ですよ。私を作ったなんて言ったら、死んでも食べてくれないですよ。

「でもさあ、肉が好きなのはいいけど、ウイシユニアはティタンに差し入れしたいんですよね？」

夕食後から本を読んでいた神官医のセルことセルジアスが、顔を上げてウイシユニアに尋ねた。彼はギル様の従弟で、ギル様によく似た顔立ちの美少年だ。

「ええ、そのように出来たらと」

「いつも植物の世話をしているようなウイシユニアが、いきなり肉を贈ったら変な子だっと思われるよ。もう少し不自然じゃないの？」

私は首を捻る。野菜や果物はいつも当たり前のように神殿からお裾分けしているからなあ。

「ハンカチとか必要な日用品は、不自由ないぐらいエノーラお姉様が支給して下さっているのよねえ。さつきも言っただけど食べ物の好みはあまりないし、服にも趣味とか特にないし、派手じゃなきゃいいとか制服が便利とか思ってるし」

その場にいた他の聖騎士達も、ああ、とか、うんとか言っている。

「本当に何もいらんじやないかな。私と似たような価値観してるから、物があつ

ても嬉しくないんだよね。みんなで分け合うのが好きかな」

贈り物をする側としては、とても難しい相手だろう。ギル様に言われるまで、それが欠点とは思いましなかった。それぐらい、わざわざ物を買って贈るなんてことは無縁な生活だったのだ。

「無欲は佳所ではありませんが……ギル様も大変ですなあ」

エリネ様が頬に手を当ててため息をつく。

食べ物も食べられればいいしね。奢りがいない人間だよ。本当にギル様は大変だ。「あ……そうだ。喜ぶ物は分からないけど、逆に嫌がられる物は分かるよ」

ふと思いついて、私は忠告することにした。

「ほ、本当？ ティタンさんはどのような物がお嫌いな!?」

ウイシユニアは祈るような仕草をして、私を見つめてきた。

「一目見て分かるほど高い物。たぶんすっごく困らせるよ。くれた人に苦手意識を持つようになるからやめた方がいい」

「……………確かに、あの無欲な方に高価な物を贈ったら……」

「挙動不審になって、どうすればいいのかゼクセンに聞いて、お返しの方に悩んで発熱するところまで想像できる」

それを聞くと、ウイシュニアは涙目になった。

「そ、そこまで……」

「そこまでよ。染みついた博愛精神はなかなか頑固なの。ホーンがその最たる例ね」
私とティタンの兄貴分であるホーンは、とても優秀な魔術師として出世した人だけど、困ったほどの博愛主義者で、いつでも子供達に奉仕していなければ気が済まない。

「無欲というか、必要ない物を自分だけが持っている状態がストレスになるみたいなの。私と違って食べ物好き嫌いはないけど、美味しい物を理由もなく一人だけもらったら困ると思う」

「そ、そんな」

ウイシュニアは贈り物自体否定されて動揺した。

私もギル様からの贈り物にはだいぶ慣れたけど、それでもすんなり受け取れるわけじゃない。婚約指輪もたまに取り出して眺めているだけで、自分の物というよりもギル様から預かっている物という感覚だ。私でさえこうなのだから、ティタンにはまだ早いだろう。

「だから何かあげるにしても、従騎士じゆうきしのみんなでどうぞって渡した方がいいと思うよ。それで印象が悪くなることはないはずだし、ギル様とゼクセンは結婚間近だから彼ら目

当てだって勘違いされることもないと思うし」

もう一人の従騎士、レイドも勘違いはされないだろう。彼もとても優秀な男だが、ウイシュニアから比べればティタンと大差ない身分だ。

「ねえねえ、それってつまり、理由があれば贈り物も受け取るってこと？」

セルが首を傾かげて尋ねた。

「まあ、何かのお礼とか。そういうので、常識の範囲内なら」

私だって、お礼として高すぎない物ならありがたくもらうだろう。

「つまり何かをさせて、お礼をするという形なら、自然にお近付きになれると」

セルの入れ知恵に、ウイシュニアは目を輝かせた。そんなことで、こんなに希望に満ちた目をするのか……。女の子は恋をすると綺麗になるといいますが、こういうのを見ると納得してしまう。

「そりゃそうだけど、何をさせるの？ 自然な形で、ティタンだけに頼る流れって？」

そう言うと、セルは肩をすくめた。

「例えば……重い物を持って待ち伏せとか。ティタンなら女の子が大きな荷物を持ってたら、間違いない持ってくれるだろうし」

なるほど。ティタンの人のよさにつけ込んで待ち伏せか。

「それで出合い頭にぶつかってみたりすると、お詫びにもなる」
 「そっかあ。待ち伏せって、誰かを嵌めるためにすることだと思っていたから、考えな
 かった」

私はセルのずる賢さに感心した。まあ悪い意味ではなくても、嵌めようとしている
 だけだ。

ウイシユニアも納得していたが、突然慌てたように自分の身体を見下ろす。

「そ、そうだわ。テイタンさんって、どういう服装とか髪型を好まれるのかしら」

「こ、好みの服装？ 清潔なら何でもいいと思うけど。洗濯するの好きだったし」

だから汚い格好をしている人は嫌いだろう。

「そ、そんな……」

彼女の趣味は庭いじりだ。たまに泥で汚れた姿で歩いているのを思い出す。

「別に仕事の泥汚れを嫌ってるわけじゃないからね。饅⁺えた匂いがするとか、そういう
 のだから。働く人は好きだと思うよ。土いじりする姿とかは、むしろ好印象だと思う」

「ほ、本当ですか？ 良かった」

「髪は……長い髪が好きみたい」

ギル様と同じで、私の髪が伸びるのを喜んでいたら。

「胸は、小さく見える方がいいのかしら……」

ウイシユニアは胸を見下ろして言う。

「え、なんで？ どうせなら大きく見せた方がいいんじゃない？ あいつも男だから、
 女の人の胸元には興味があるみたいだよ」

カリンのような巨乳ならともかく、ウイシユニアは普通かやや大きいぐらいだ。悩む
 必要などあるまいに。

「そう。それならよかったわ」

彼女は拳^{こぶし}を作り、うんうんと頷いた。

ウイシユニアはあまり感情を表に出さない子だ。美人だけど潔癖なところがあって、
 軽い男をひどく嫌う。そんな奴らには氷のように冷たい目を向けることさえある。

その一方で花が好きで、神殿の庭に植える花を選んだのは彼女だ。庭師と相談し、土
 で汚れるのも厭^{いと}わずエリネ様に相応^{あつかわ}しい庭園を造った。品はあるがわざと野性味も加え
 て、四季を通して花を楽しめるようにしている。誤解を受けやすいが、真面目な女の子
 なのだ。

私達は彼女の気持ちを知っているから、彼女がテイタンを前にして様子がおかしくな

るのも、一生懸命話そうとしているからだと分かる。しかし知らなければ、何か別の理由があると考えるのは当然だろう。特にティタンは出世した後にはモテるようになったから、自分自身の魅力でモテているとかは全く考えていない。なので余計に勘違いしないように自分を律しているはずだ。

私からも、王子様の従騎士なんて看板に釣られる女性には気を付けろ、と言ったことがある。もちろんその看板は、彼の実力を裏付ける魅力の一つなので、それを切っ掛けに興味を持つことを否定するわけではないけど。私だってギル様に王子様という看板がなければ、今とは違う関係になっていただろう。

などと、エリネ様の部屋の窓際であれこれ考えていると、建物の陰で待ち伏せていたウイシュニアが見えた。早速計画を実行しようとしているらしい。肥料の袋を抱えて、レイドと連れ立って歩くティタンの前に飛び出た。

「きゃっ」

「うわっ」

勢い余ってウイシュニアが足をもつれさせたので、ティタンは驚きながらも咄嗟に手を出した。

ウイシュニアの身体の前面に。具体的に言うとういシュニアの胸の前に。

先ほどウイシュニアの相談を受け、窓からこっそり彼女の動向を見守っていた私達は、予想外の展開に目を丸くした。

「……………ず、ずるいっ」

一緒に見ていた誰かが口にした。恩を売らせて差し入れをする計画が、ティタンの痴漢行為で台無しである。親切にしたのに殴られても仕方のない展開だ。

「あちゃあ……どうするこれ」

近くにいたセルが呟いた。

一方、ティタンはウイシュニアを起こしたものの、狼狽のあまり土下座を始めた。

他の誰かならともかく、ティタンならウイシュニアもそう怒らないだろう。事故だし、むしろ自分から突っ込んでいったんだし、快く許してくれるはずだ。だがティタンはそんなこと知る由もないから、乙女の胸に触れてしまった以上、もう謝るしか道はないと思っただよう。

好きな人の土下座を受けたウイシュニアは、胸を抱えながらおろおろしている。

「ルゼ様、これは、どう取めたらよろしいのでしょうか……」

エリネ様が土下座するティタンを見つめて私に問う。

「エリネ様が外に出て仲裁するのも一つの手だけど、それじゃあティタンが引きずるだ

ろうし……誰かが冗談っぽく一発殴っておくとか」

それなら、多少罪悪感も和らぐだろう。後でウイシユニアも謝罪がしやすい。

「では、マデイさん……」

エリネ様は見習い神官騎士のマデイさんに視線を向けた。彼は顔を引きつらせる。

「いや、マデイさんは真面目すぎます。もう少し柔軟な対応の出来る……バルロード」

私はギル様にちよつと後ろ姿が似ていると評判の同僚に視線を向けた。

その時だ。

「じゃあ、せ、責任を取って下さるっ!？」

ウイシユニアの声が聞こえた。私達は再び目を丸くする。

自分でどうにかしようとしたようだが……責任って何の責任？ どうやって？

私がティタンならますます混乱しちゃうよ。そこからどうすんの？

「ええ、えつと、そそそ、そのっ、出来るだけのことはするけど……せせせ、責
任っ!？」

案の定、錯乱するティタン。

「せ、責任は、責任よっ!」

ウイシユニアも混乱している。

「ルゼ、確か君、頭の中に直接呼びかけられるんだったよね」

どうしていいのか分からないでいる私に、セルが声をかけてきた。

「まあ、この距離なら」

ギル様となら、魔導具の指輪で繋がっているから、どんなに離れてでも大丈夫だけど。

「買物の荷物持ちを頼むとか、ウイシユニアをもう少し分かりやすい方向に誘導
し……」

セルは二人を見ながら言ったが、途中でまたウイシユニアが口を開いた。

「け、結婚を前提にお付き合いして下さいっ!」

うあ………言っちゃった!

少しづつ仲良くなつて、距離を縮めてから言おうとしたことを、目茶苦茶断りにくい
この状況でっ! 言っちゃった!

「えええええっ!？」

ティタンどころか、たまたま近くを通りかかった他の人達も声を上げる。ウイシユニ
アは見られていたとは思っていなかったのか、驚いたようにきよるきよるしてから顔を
手で隠す。そして、

「お、覚えておいて下さいっ!」



と叫んで、そのままどこかに走っていった。

ええっと、私達はどうすればいいんだ。

「だ、誰か、ティタンのフォローを」

「具体的にどうやって？」

セルに冷静に問われて、私は黙った。こんな奇妙な場面に遭遇した経験など、私にはない。もちろんセルや他の皆もないだろう。難しい。難しすぎてどうすればいいのかわからない。

ティタンの隣にいたレイドは、あまりにも予想外な展開に巻き込まれておろおろした後、ぶちまけられた肥料を集め出した。混乱しすぎて、気を紛らわせようとしている。そして当のティタンは、茫然自失の体であった。思考が停止している。復活するには、だいぶ時間がかかるだろう。

「よし、ギル様に丸投げしよう」

「それでいいんですか？」

エリネ様に問われて、私は精一杯の笑顔で頷くしかなかった。

ギル様に助けを求めても頭を抱える人が一人増えるだけだろうけど、夫婦になるのだから悩みは共有すべきである。自分の直属の配下のことだしね。相談しない方が不自然

なのだ。

その夜、私はギル様に呼び出された。

彼の部屋の長椅子に並んで座る。最近、騎士団の報告ついでに、たまにこうやって二人で過ごす。その間、ギル様は私の肩に手を回してきたり、髪を撫でたりしてくる。

おまけにどういうわけか、たまに酒類を飲ませてくれるようになった。前は酒乱だの何だのと言って私からグラスを取り上げていたのに、謎である。まあ、別にお酒が好きなわけではないけど。

「さつきテイタンから話を聞いた。お前が報告したようなことがあったと言っていた」
ギル様は頭が痛むかのように額を押さえて言う。どうやら丸投げしたのを怒っているわけではないらしい。

「テイタンはまさかウイシユニアがそこまで貞淑だとは考えてなかったから、どうすればいいのかわからないと相談してきた」

貞淑って言うのかな、あれ。

「難しいところです」

たかが胸。されど胸。嫌いな相手にわざと触れられたら殺してやりたいほどむかつくし、

役人に突き出せば投獄することも出来るだろう。だが知人がうっかり触れたぐらいならちょっと怒って許してやれることだし、今回のように好きな相手なら恥ずかしいだけだ。何にせよ結婚を迫るほどの行為ではない気がするけど、女の子のことが分ならず泣きそうになっているテイタンの顔が想像できる。身分違いすぎて結婚なんて無理だと思ってるだろうし、でも罪悪感があるから無下にも出来ない。まさか最初から好かれていよとは考えもしないはずだ。

「ウイシユニアも混乱していません。ラントちゃんを抱えて菓草園の茂みの中で反省している最中なので、責めないでやって下さい」

「ラントが相談役か。恋愛関係だと、あいつも困るだろうな……」

ラントちゃん、彼女いないしね。でも慰めるのは上手いから、彼に任せておけばそのうちウイシユニアも出てくるだろう。

「で、そのテイタンはどうしたんですか？」

「ゼクセンに任せた」

「まあ、適任ですね」

真面目だけど真面目すぎず、その上結婚も控えている彼は、脳気を装って良いように慰めてくれるだろう。少なくともこういうことに関しては、セルやレイドより向いて

いる。

「しかし、まさかこんな形で話が進むとは……」

「しかも状況が状況だけに断りにくいですよ。ウイシュニアは可愛いですし」

私と違って、そこそこ胸はあるし。モロに掴んでたようだから、テイタンも忘れるに忘れられないだろう。一緒に見ていた他の聖騎士達が妬んで毒を吐いていた。

「セルが明日、ウイシュニアの弟に相談しに行くそうです」

「……………それには、僕が付き添わなくてもいいだろうか？」

「彼女の弟とは友人だそうですから、まずは二人で話をさせた方が」

彼女の弟も、こんなことに巻き込まれて可哀想に。女の人なら男女を引つつけるのが好きな人も多から乗り気になるかもしれないが、男の子が姉の身分違いの恋を知ったらどう思うか。

もしもの場合は、ギル様が全力で手回ししてくれると聞いたら、きっと余計に困惑するだろう。

「なるようになれって感じですね」

「言い方は悪いが、それしかない……」

私達は顔を見合わせて、ため息をついた。二人の関係が動くとするれば、もつとずっと

先のことだと思っていた。まさかこんなに早く動くとは……

「私は、ああはなれそうもありません。恋する乙女の行動力というのは、すごいものですね」

私なら、叶わぬ恋だと思った時点で行動などせず諦めてしまおうだろう。心を殺すのが一番簡単だし、ほとんどの人はそうしているはずだ。

それに私は、好きな人が幸せでいることが一番大切だ。だから私が愛して止まない天族のノイリと、竜族のニアス様との仲も泣く泣く認めたのだ。

もし私が結婚した後、ギル様に他に好きな人が出来たとしても、快く応援しようと思う。何ならその人と重婚してくれてもいい。この国では、複数の妻を養えるならという条件付きで重婚が認められている。まあ、恋愛は一对一でするものというのが世間の常識だし、重婚する場合は重婚税というとても高い税金を払ったり、妻を平等に扱わなきゃいけないからかなり面倒なようだけだね。だから普通の人は火遊びで済ませたり、外で愛人を囲うだけにとどまるらしい。

私にはお金持ちの家庭の事情なんてよく分かんないけど、どちらにしても子供が可哀想だと思うようになった。父親の好きさと、彼を巡る女達の対立に翻弄されて育った可哀想な子供が、他ならぬギル様だったりするしね。だからギル様もよほどのことがなけ

れば重婚などしないだろうが。

そんなことを考えていたら、ギル様が足を組み替えながら言った。

「お前の行動力は、恋する乙女どころか、他の追隨を許さないとと思うが」

「え、そうですか？」

「ああ。地下でお前にされた仕打ち、忘れたわけではないぞ」

そういえば、行動力がなければ不可能なことを色々やったなあ。ギル様が誘拐された拳げ句に別の傀儡術師かいらいじゆつしに操られて攻撃してくるから、下剤効果のある解呪薬かいじゆやくを口移しで飲ませてポイ捨てとか。

ちよつと反省しているけど、今考えてもあの時はあれしか方法が思い付かなかつた。

「しかし、本当にどうするか……」

ギル様はうんうんと唸るうなる。

「エリネ様のことは私に任せて下さい。他の世俗的なことはお任せします。頑張つて下

さう」

「あのなあ……」

ギル様は何度目かのため息をついてから、ふと顔を上げる。

「そうだ。お前の父に相談するか。テイタンの親候補もアーレルに見繕みつくるってもらつてい

るからな。そっちも何とかなるらしいから大丈夫だろう」

それなら確かにお父様に相談するのが一番だ。

頑張れギル様。そして巻き込まれるお父様。

きつとお父様なら何とかしてくれるに違いない！

第二話 素直になれない憂鬱な彼

僕——ギルネストはお気に入りの茶の味を楽しみながら、すっかり秋めいていた窓の外を眺めた。

落ち葉が降りしきり、庭の掃き掃除も大変な時期だ。果物が美味しい季節でもある。注文している新しいジャムが楽しみだ。

ルゼは果実そのままの方が好きだから、それも取り寄せている。彼女は林檎や梨が好きだ。食の細い彼女が物を食べている姿を見ると、何とも言えない幸福感を覚える。

ふと、ため息の音が聞こえた。ため息の主は、先ほどから椅子に掛けてじっとしている、友人のニースだ。彼は僕の執務室に来たかと思えばため息をつくばかりで、理由は話そうとしない。まあだいたい、こいつがこんな態度をとる理由は一つしかないんだが。「グラと何かあったのか？」

自分から切り出すのを待っていたのでは日が暮れると判断して声をかけた。

ニースを知っていれば誰だって思いつく質問を口にする、彼は驚いた顔をして顔を

上げた。

グランディナは僕の双子の妹で、ニースの婚約者だ。親同士が決めた婚約とはいえ、ニースはグラを幼い頃から一途に想い続けている。だが、それが全く通じていない。むしろ嫌われている。

「何故分かった？」

「誰だって分かりますよ」

突っ込んだのは書類とにらめっこしていたゼクセンだった。彼も僕らとの合同結婚式が近いので、休みの日は準備で忙しい。そのためか少し気が立っているのだ。

親友の僕ならともかく、いつものほほんとしているゼクセンにここまで言われたせい、ニースは目に見えて落ち込んだ。

「言っておきますけど、僕はえっちゃんに嫌われるような真似はしたことありませんよ。だから愛されてるんです」

あ、ますます落ち込んだ。

ゼクセンは、いつも婚約者を怒らせるニースなどとは一緒にしてほしくなかったようだ。

「あの、それでニース様はどうしてそんなに落ち込んでいらっしやるんですか？」
 ティタンが気を利かせて話を進めた。こいつのこういう性格が一部の女性に人気なの
 だろう。自分自身もウイシュニアのことで大変なのに。

ちなみに、こいつは週末にデートをする約束をしているそうだ。お互いをよく知る必
 要があるからと言われて。有無を言わせぬ迫力に、気が付けば約束させられていたらしい。
 もうウイシュニアは開き直ってしまったようだ。行動的になった時の女というのは、
 本当に恐ろしい。基本的に気の小さなティタンはたじたじた。

ニースもそれぐらい押せばいいのに、それが出来ないでいるから思いも伝わって
 ない。

「ついさっきのことなんだが……」

ニースはうつむきながら語り出した。

ニースは身分違いを乗り越えようと努力するウイシュニアの姿を見て、自分もグラと
 の関係を改善するため、本格的な行動に出ようと思ったらしい。

しかしまずどうするべきかが分かるなら、とつくに行動していただろう。それが出来
 ないニースは身近な、それも同じ神殿に詰める女達……具体的に言うるとルゼとカリンと

ウイシュニアに相談した。

ニースは女達に、差し入れの菓子という名の賄賂を渡して、こう聞いたそうだ。

「お前達に聞くのは自分でもどうかと思うんだが、どうしたらグラの誤解を解くことが
 出来るだろう」

この単刀直入な悩み相談に、ウイシュニアは首を傾げた。

「普通に好きだと言えはよろしいのでは？ 何の障害もない、婚約者なのですから」
 障害ばかりの女が言うのと、重みが違う。何せ彼女の相手は責任を感じてデートを承諾
 してくれただけで、それがなければたぶん避けられていただろうから。

「べ、別に嫌いだと言ったわけではないのに」

「一つご忠告申し上げますが、嫌いではないと言うのは、好きだと言ってることにはな
 りませんよ」

ルゼは的確に事実を見抜いてそう言ったそうだ。

「エディアニース様は親が決めた婚約者同士という関係に甘えていらっしやいますわ」
 これまた辛辣なウイシュニアの言葉。

「ええ、そうですわね。そういえば姫様は、地下でルーフェスといい雰囲気話をして
 いました。彼が騎士をしていた時は、姫様と噂があったほど仲がよろしいようですが」

これはカリンド。さすがはリザンド神殿の辛辣な女代表である。確かにグラは、ルゼの双子の兄ということになっているルーフェスと仲がいい。しかしその親しかつた騎士は、男装して入れ替わっていたルゼだ。だから実際にルーフェスとグラが会ったのは二回だけ。なのに、子供の頃から顔を合わせていたニースよりもグラに好かれている。ルーフェスが女性に親切だというのはあるが、それ以上にニースが嫌われすぎているのだ。

「では……好きだと言つて、納得すると思うか？」

すると女達は首を捻つた。もちろん近くにいたエリネ様や巫女達も。

「冗談だと思われるかもしれませんが」

と、エリネ様が言った。すると、

「それならいい方ではありませんか？ 質の悪い悪戯……もしくは姫様をダシに何か賭け事をしていと思われるかもしれません」

と、カリンが言ったそうだ。

本当にどうしてそんなに辛辣になってしまったのだろうか。三割ぐらいは僕のせいかもしれないが、それだけではないはずだ。

「私がそんなことをする卑劣な男に見えると言うのか!？」

「ええ、見えます」

ニースはカリンのその言葉に衝撃を受けて、ふらふらとこの執務室までやってきたらしい。

「カリンさん……」

ルゼと親しくなったばかりの頃の、大人しかったカリンを知っているティタンは額を押さえる。

……本当に、あの頃は大人しかった。あれがああなるとは、女は恐いな。でもウイシユニアがああなったのは、僕は全く関係ないぞ。ティタンのせいだ。

弱り切ったニースを見て、ゼクセンがペンを置き、口を開いた。

「意地悪そうな見た目はともかく」

「意地悪そう!？」ゼクセン、お前までそんなことをつ!？」

ニースはゼクセンにたたみかけられて、さらに動揺する。

「あのですねニース様。そう見えなかったらサドだの何だのとは言われませんよ」

「それはギルがサドっぽい顔をして、鞭を振り回したりしているからだろう!? 私はどちらかと言えば正統派じゃないのかつ!？」

おい。

「まあ、ギル様と並んでいたからというのはあると思いますけど」

おい。

「でも子供の頃からの積み重ねは大きいですよ。今さら切り離して見るのは難しいかと」
ゼクセンは肩をすくめて言う。

「子供の頃の印象は、引きずるんです。特に悪い印象の場合なかなか挽回が難しいですよ」
それは言えている。

これはティタンにも当てはまる。悪い印象というわけではないが、彼は女として慕っていたルゼから、兄としてしか見られていなかった。僕とルゼが結婚しなくても、彼の恋が実ることはなかっただろう。

だから他の女に惚れてくれればと思っていたのだが、何故積極的に動いたのがあのウイシユニアだったのか。色恋沙汰というのは難しいものだ。

「ニース様の悪いところは、姫様の前では必要なことしかしやべらなくなってしまうところですよ。ギル様とは普通に話すので、嫌々話しかけられていると勘違いされるのも無理ありません」

「うっ……」

「見た目はこんなに美男子なのに、どうしてこんなに残念なんでしょうねえ」

ゼクセンはニースが持ってきた菓子を食べながら呟いた。

ニースと言えば、金髪碧眼で、ルゼが王子様みたいと言うほどの美男子だ。しかもでたらめに強くて、国内一の剣士と言われており、上辺だけなら完璧だとも言っていた。

馬鹿ではないはずなのだ。だが、ルゼが言うには『脳筋』なのだそうだ。困ったら僕に任せるか、殴り倒せばいい的な発想をするのだ。だから相手が女で、それも一対一だと何も出来なくなる。

「ルゼとは言わないが、ルーフエスの要領の良さぐらいは見習ってほしいものだ」

「ニース様がルーフエスぐらい出来たら、大抵の女性は一日もあれば陥落しますよ」

「確かに」

ニースは動揺しながら僕とゼクセンの顔を見比べる。

ルーフエスはほとんど家の中で過ごしていたのに、ニースよりもよほど上手く人間関係を築いている。反対にニースは人から誤解を受けやすい。

「ウイシユニアじゃないが、誤解しようがないほどはつきりと自分の気持ちを伝えるしかないだろう」

「う……」

「何が難しい？ 好きだ、結婚しろと信じるまで言うだけだ」

「う……そ……その」

「僕は言つたぞ。あのルゼ相手に」

物理的にも精神的にも逃げられないようにするのは大変だったが、なんとか捕まえられた。

今では二人きりになると、そこそこ可愛い反応もするようになった。間違えてブランドーの入った菓子を食べて酔っ払った時など、暴言を吐きながらも妙に甘えてきたりして可愛かった。

もちろん酔っていなくても、昔に比べれば素直なものだ。皆の前だと相変わらず可愛げがないから、その差がけっこう可愛い。そんな様子を見ると幸せだと思える。結婚するのが、家庭を作るのが楽しみだと思える。

この幸せを友人にも分けてやりたいが、頑張るのは不器用なこの男なのだ。

「そんなんじゃ、そのうち本当にルーフェスに取られますよ」

ゼクセンは一番可能性の高い未来を口にする。

「レイドも、見守ってるだけじゃ進展しないからね」

部外者の顔をしていたレイドは、突然話を振られてむせた。菓子を喉に詰まらせたよ

うだ。

「確かモラセアに気があるんだっただか？」

「げほげほげほっ」

テイタンがレイドの背をさすり、ゼクセンが水を差し出した。

「休みが欲しければ言うといい。モラセアは誰か他の男に惚れている様子もないし、テイタンと違って何の障害もないから心から応援してやる」

「そ、その……」

肩で息をしながら、レイドは上目遣いで僕を見た。テイタンは名前を出されたせいか、視線を泳がせている。

「モラセアさんのように高位の巫女様を、どこに誘えばいいんでしょうか？」

「植物関係の場所、美術館、図書館、それに神殿なり何なりに献花しに行くとか、色々あるだろう。彼女は末娘で、父君は教師をしているそうだ。社会的に尊敬される職業だから、お前との釣り合いも取れている。いつか父親に紹介してもらえよう頑張ってみろ」

こういった情報は知らなかったのか、レイドは驚いた顔をしていた。

「エリネ様の身の回りの人間に関するのことを、僕が知らないはずないだろう」

「そ、そうですね」

レイドは自分を納得させるように頷いた。

「断る理由はないから、デートぐらいはしてくれるだろう。切っ掛けが欲しいなら、何かの入場券でもゼルバ商会に手配してもらえ。ゼクセンにもらったからと言えば、誘いやすいだろう。後はお前次第だ」

「わ、分かりました」

レイドは真剣な顔をして頷いた。

「自分も頑張ってみます。だからニース様も頑張ってください！」

ニースの頬が引きつった。僕はレイドのこういうところが結構気に入っているのだ。

生真面目で前向きだ。

「し、しかし、用があつて外に連れ出そうとしても、忙しいと断る女だぞ」

「今ちょうど、城下で魔術関係の美術展をやっている。古い本や魔導具が展示されているんだ。お前にはそのチケットを手配してやる。俗世に疎いグラはそういうのがあると知らないだろうから、たぶん食いつくぞ」

それを聞くと、ニースは一瞬希望を見出したような顔をしたが、すぐに不安げに胸を押さえた。そして自信がなさそうに言う。

「だ、大丈夫だろうか？」

何と言うか、こればかりは大丈夫とは言いがたい。我が妹ながらあいつは変わり者である。ニースが誘ったのに、何故かルゼを誘いに行く可能性がある。

「お前からチケットを奪って他人を連れていかないと、周りにはあいつの誘いは断れと念押ししておく」

そうなると同じ職場のホーン達にも手を回さなければいけない。もし二人のことが上手くいったら国からの予算を増やす交渉を手伝うと言えば、喜んで協力してくれるだろう。

「いいか。ルゼじゃないが、お前は一度ぐらい当たって砕ける。砕けても諦めずにおつかれ。粘り勝ちしか道はない。なのに砕けるのを恐れていてどうするんだ」

僕は親友を真つ直ぐ見つめて言った。彼はごくりと唾を呑み、僕を見つめ返す。

「そうですね。今はもう砕けてるに等しいのに、事実から目を背けるだけです。だからちゃんと意思表示をして砂になるまで砕けてみましょうよ。いつかきつと根負けしてくれませよ」

僕に続き、ゼクセンも追い打ちをかけた。

「砂になるって……」

「大丈夫です。今が底辺。これ以上嫌われることはありません。女の子は、何だかんだ

言つて自分を好きだと言ふ人を嫌えませんか。常に付きまತ್ತたり、ゴミを漁つたり、部屋に忍び込んだりとか非常識なことをしない限り」

まあ、どんなに顔が良くても、それをしたら嫌われるな。付きまといまでは顔が良ければ許されることもままあるが。

「つまりセレイン様のようにしなければいいんだな」

「うちの兄は付きまといしかしていないだろう。ゴミまでは漁っていない……はず」

そのはずだ！

「手紙を書くというのも一つの手なんです、ニース様に気の利いた文章なんて期待できませんし」

確かに愛を文に綴るニースなど想像も出来ない。要求を淡々と書くのが精一杯だろう。淡々と要求するなら、面と向かつてやった方がまだマシだ。

ニースは僕が母のせいで失恋し、ヤケで青盾の騎士団に異動した時も、一緒に異動して付いてきてくれた男だ。

その恩に報いるためにも何とかしてやりたいのだが、こいつのグラ限定のヘタレぶり、はつきり言つて僕でも匙を投げたいほどである。

数日後、美術館にて。

僕はこの国ではありがちな茶髪のカツラを被つて眼鏡をかけ、さらに赤毛のカツラを被つて女装したルゼと腕を組んで展示品を鑑賞していた。近くではセルとカリンが他人を装つて鑑賞している。二人ともやはり茶髪のカツラで変装済みだ。

言うまでもないがここは、ニース達がデートに来ている美術館だ。

どうしてこうなった？ もちろん女達が心配したからだ。主にニースがまた暴言を吐かないかとか、緊張のあまり奇行に走らないかとか、気付いたら二人がバラバラにならないかとか。

そもそも手を繋ぐ勇氣すらないから、はぐれる可能性は高いと聖騎士達も言い切った。僕もそれを否定できなかった。だからセルが、そうならないよう見張るため彼らに内緒で尾行しようと言ひ出したのだ。何せ相談を受けたのだから、最後まで見守らないといけないだろう、とも。

そしてこうなった。僕以外は楽しそうだ。

僕も婚約者との純粹なデートなら楽しいのだが、妹と親友のデートをこそこそ尾けるのは、何と言うか心が痛い。

しかし皆の指摘は、今までの行動を見るにもっともなのだ。僕がもっと早くに口も手

も出して助けるべきだったのか、誰かお節介な奴の介入を許すべきだったのか。グラもグラだ。婚約しているというのに、その自覚が全くない。そろそろ結婚しないと嫁き遅れだ。

だいたいグラは姫のくせに自由すぎるのだ。今だってニースがいるとはいえ、王族の姫が護衛もつけずに外に出るなど異様だ。いや、ニースがいなければ一人で出かけただろう。

腹違いの妹パレシアならありえない。僕も大概自由に行っていると思うが、男だからまだいいのだ。変装すれば気付かれないしな。

現在、グラはひたすら展示品を眺めている。他国から集めた逸品揃いであるせいか、まるで菓子を前にした子どものような目をしている。ニースはそんな童心に返ったグラを眺めつつ、鼻の下を伸ばさないようにしかめっ面をして、時折頬を痙攣させていた。

これだけであんなに嬉しそうにするとは、だから女共に程度が低いと言われるのだ……

しかしニースの好意を知らなければ、ただただ不気味である。

幸いにもグラは熱心に展示品を見ているから、彼の表情に気付いていない。そしてその熱心さのおかげで、僕らも前に進めない。まあ他の客からは不審に思われても、前の

二人に気付かれなければいいのだが。

「ねえ、私とセルって来る必要あったのかしら？」

少し離れたところで何かをじっと見ているふりをしているカリンが、隣に並ぶセルに尋ねた。

「僕は面白いから来たかいがあるよ」

そういえば、セルがルゼと友人になったのも、気が合う、面白い、というような理由だったな。

「私はつまらないわ。あの二人はあんな調子だし、ただの古い腕輪を見てもねえ」

「まあ、歴史があるって物だけで、綺麗な物はあんまりないもんねえ。グラ姉さんも趣味が偏ってるから、自分の好きな物だけ見て足が進まないし」

女僕然としたカリンでも、趣味は普通の女だ。見ていてつまらないだろう。

「というか、どうして私と一緒に来たのがセルなの？ あなた、あそこにいるヘタレ男の友人に似てるし、この顔が二つあったら目立つでしょう。別の人が来た方が怪しまれなかつたんじゃない？」

……ヘタレ男の友人とは僕のことか。

ルゼは今、傀儡術でニース達の動きを窺っているので愚痴れない。

ルゼの傀儡術は物を動かすだけでなく、探査にも応用できる。目に見えない糸を伸ばして探る感覚らしい。便利だが、集中力が必要なので邪魔できない。まあこいつの場合、雑談しながらでも出来るだろうが、わざわざ話しかけて妨害するような用でもない。

だが、何と言うか……暇だ。僕は魔術師だが研究者ではないから、こういうのを見ても心が動かない。使える道具なら欲しいと思うが、ただ見るだけというのは……。きつとカリンもこんな気持ちで愚痴ったのだろう。

「しかし、意外と人が来るな」

僕はこちらをちらちらと見てくる他の客を横目で見た。

魔術師でなくても、こういう物に興味がある者は多いらしく、そこそこ人が入っている。やはり微動だにしない客は珍しいのか、たまにじろじろ見られる。まさか、僕が王子でルゼが女聖騎士だとは気付いていないだろうが。

この気まずいデートはいつ終わるのだろうか……。グラは無言だわ、ニースはむっつりしているわけで進展はないし、これではデートが成り立たない。

形だけなら僕らも立派にデートなのだが、出来ることなら僕はもう少し普通のデートがしたかったな……

双子の妹と友人はようやく美術館から出ると、どういうわけか公園にやってきた。

ニースが誘ったのだろう。やれば出来るじゃないか。てつきりそのまま帰ると思っていたから、大した進歩だ。これもウイシュニアのおかげだろうか。あのニースがここまで成長するとは……

既に日が傾いていて、公園内には少なかった。

二人は店じまいしようとしていた露店で何かを買い、そのままさらに人気のない場所に向かう。グラは人気のない場所の方が好きだから、何の疑いも持っていないだろう。木陰に隠れながら僕達も後を追う。

「告白でもする気でしようか？」

ルゼが胡散臭そうに言う。

「あのヘタレに出来るのかしら？」

「その気があっても、実行力がなきゃねえ……」

どうやら、女達は全く期待していないらしい。カリンなどずっと呼び方がヘタレになっている。

いつぞやと同じように、二人はベンチに腰掛けた。そしていつぞや見た時と同じように、ニースはグラの肩に手を置くのを躊躇って、先ほど買った物にかじりつく。

肩ぐらい抱け。いいから抱け！ 諦めるな！ ただその手を置くだけだ！

ああ、既に満足そうな顔をしている……。ただ並んで座っているだけなのに。

ルゼは今まで何度も繰り返し返されたヘタレな光景を眺め、ただただ呆れていた。僕が肩を抱くと身をよじるくせに。

「ギル様、ニース様って童貞ですか」

ふと、様子を見ていたルゼがぼつりと言った。その手の話題は口にするのすら躊躇う、どちらかと言えば奥手なルゼの口から、そんな下品な言葉が出ようとは。

「な……。何でいきなりそんなことを……」

僕は動揺で声が震えた。

「ギル様がグレた時色んな経験をしたのは知ってますけど、ニース様の話は聞いたことがないので」

「そ……そんなことを聞いたって、答えると思うのか？」

肯定も否定もニースの擁護ようごになる気がしなかった。

「殿下、ルゼにそのような話を？ 馬鹿ですか？」

カリンが冷え冷えとした目で僕を見るので、声を抑えつつも言い返す。

「ルーフェスにだ、ルーフェス！ 僕がこいつにそんな話をするはずがないだろう!」

その当時のルーフェスが、変装していたルゼなのだが。

ああ、僕は何でそんな余計なことを話したんだ！ だが、話したのは最低限だったはずだ。それでも変態のような扱いを受けている気がするが、あれぐらいなら普通だ。いや、待て、僕はどこまで話した？ 覚えがない。

それはともかくどうするべきか。何か言い訳すべきか。

「兄さん、余計なことと言わない方がいいよ。言い訳すればするほど泥沼はに嵌まり込むから」

セルが混乱する僕に忠告した。そう、昔の男女の話はしないのが一番だ。なのにセルは変な風が続けてくる。

「たまに言わないせいで拗こじれることもあるけど」

「たまに？」

「実は子供がいたとか」

「そんなのといっしょにするな」

いるはずがないだろう。もし子供がいたら隠すことなく溺愛てんあいしている自信があるぞ。

「たまにいるんだよ。女性の選り好みえりごみが激しいギル兄さんには、心当たりがほとんどないだろうからいいけど」

「だから、少しはあるようなことを言うな」

しかも気難しい婚約者の前で。この女なら、僕に隠し子がいたとしても全く気にしうにないが。そう思うとさすがに切ない……

「僕は浮気は絶対にしないからな。ああいうのは虫酸むしずが走る」

「兄さん知ってる？　こそこそ浮気をする男って、何故かそう宣言する人が多いんだよ」

「セル、僕に恨みでもあるのか？」

「事実を言ってるだけだよ。本当に多いんだ。犯罪者にも言えることだよ。ある犯罪を嫌悪感丸出しで排除しようとした人が、実はその犯罪に手を染めていたって。自分が疑われないように、自分以外の犯人を生贄いけにえにしているんだよ」

「お前、その歳で何を悟ったようなことを……」

「医者も学生も聖職者も、色々とドロドロが見られて面白いんだよ。女の子の前で話せるような内容じゃないけどね」

悪趣味な奴だとは知っていたが、本気で悪趣味な奴だった。

「声高に綺麗事を言う奴ほど怪しいのはよく分かるが、僕は違うだろう。親の轍くろを踏むつもりはないぞ」

「まあ、親が嫌だっというのはよく分かるけどね」

母も嫌いだ、面食いで女癖の悪い父も嫌いなのだ。

僕は、腹違いの兄弟が今の倍ぐらいいても驚きはしない。あの性格のせいで、今や父の周囲には女性の使用人がほとんどおらず、いても父の好みではない女性だけなのだ。そのように仕向けた点だけは母を評価している。

そんな環境で育ったから、家族仲のいいオブゼーク家の人間や、一途な従騎士じゆうきし達を見ていると落ち着くのだ。

「でも、そういう人ほど親に似るんだ」

「お前はそんなに僕を浮気者に仕立て上げたいのか？」

「一般論だよ、一般論」

セルは僕の反応が楽しいのかケラケラと笑った。ああ、我が従弟いとこながら何て性格が悪いんだろう。

「むっ、静かに」

ルゼに叱られ、僕らは妹と友人に視線を戻した。

その瞬間、ずっと宙に浮いていたニースの手が、グラの肩に置かれた。

「ついにっ」

前回、これすら出来ず諦めたのを目の当たりにしていたルゼは、その精一杯の勇気あ

る行動に感極まり、拳こぶしを握りしめた。

「ニース様、成長なさいましたね」

「……あれで、成長ねえ……」

呆れたように言うセルと、その隣で同じく呆れ顔をしているカリン。

「今まであれすら出来なかったの！」

本当に微々たる成長ではある。しかし、ニース的には大きな成長だ。ルゼの言う通り、あれすら出来なかったのだから。

「嫌がられているわよ」

カリンが指摘する。

本当だ。手を払われて採め出した。

「何よ暑苦しい」

「う、うるさい。黙れっ」

これだからダメ男は、と言いたげな視線を向ける女二人。僕も同意せざるを得ない。黙れないだろう、黙れば。僕もルゼによく言うが、時と場合は選んで言っている。

「ニース、どうしたの。あなた変よ。いつも変だけど今日は余計に」

グラは不気味そうにニースを見上げた。まあ、不気味に思うのも仕方がない。

立ち読みサンプルはここまで

「ど、どこが変だと言うんだっ!」

「急に教養がないのを自覚して美術館に行きたいなんて言ったりして、おかしいでしょう。それに誘うなら身近にいるカリンにすれば良かったんじゃないの?」

カリンの名が出たのは、彼女に特定の相手がいないからだろう。当のカリンはそれを聞いた瞬間、あからさまに顔を歪ゆがめた。そんなにニースが嫌なのか。

「カリンには、セルがいるだろう」

「え、あの二人、もうそんな仲なの?」

「そうではないが、よく一緒にいるぞ。カリンもセルの顔は好みだろうしな」

怒鳴り出さんばかりのカリンの口をルゼが塞いで押さえ込む。さらに近くにいた鳥に視線を向け、おそらく傀儡術かいらいじゆつを使って蹴散らしたのだろう、飛び立つ羽音でこちらの気配を誤魔化ごまかした。

いつもならこれでも誤魔化せないだろうが、注意散漫な今のニースには十分だった。何とか話を戻そうと必死になっている。

一方こちらではセルがふくれっ面をしていた。

「そんなに僕と噂されて嫌なんだ。傷つくな。繊細せんさいな年下の男の子に対してひどいよ」
「私、その顔はどちらかかというと嫌いなものよ」